



[平成 30 年 7 月 11 日 定例会発表要旨]

幕末の浜益～蝦夷地と荘内藩の関わり

荘内藩陣屋研究会 副会長 佐藤 睦 氏

石狩市浜益区の川下地区には、荘内藩（＝鶴岡藩：山形）の城下町だった時代があります。「荘内藩陣屋研究会」では、なぜ荘内から浜益に人々が移り住んだのかをテーマに研鑽してきました。その一端をお話したいと思います。

幕末は蝦夷地でも外国船が姿を現すようになり、特にロシアは「日露和親条約」締結後も接近を繰り返していました。幕府も放っておくことができなくなり、安政 6（1859）年 9 月、東北六藩に対して「蝦夷地開発 守衛之儀」を達し、荘内藩には西蝦夷地のテシオ（天塩）・トママイ（苫前）・ルルモッペ（留萌）・ハママシケ（浜益）の四



場所を与えて、アツタ（厚田）から積丹半島をさらに南下したヲタスツ（歌棄）までの海岸警備を命じます。藩はさっそく臨時御用掛を設けて主要人事・陣屋建設・警備対策等の 10 項目を決め、窓口となる「蝦夷拝領地取調所」を藩校『致道館』^{ちどうかん}に開いて、拝領地受取人を任命しました。調達した開発資金は計 5 万両、荘内藩による蝦夷地の経営の柱は、兵備・漁場・土地開墾の三点でした。

万延元（1860）年春、箱館奉行から領地や漁場の引継ぎを終え、「本陣地場所はハママシケ、脇陣屋をテシオ・トママイ・ルルモッペに置く」と定めます。荘内からは藩士のほか郷夫・職人らがハママシケに到着、開墾と同時に大庄屋 齊藤準之助の先導で本陣屋の建設に掛かりました。敷地は、浜益川北岸の海岸から 5～6 丁奥に広がる 5 町歩程の低い丘陵地にありました。建築資材は全て酒田港から運ばれ、陸揚げのために浜益川から陣屋まで 4 丁（約 435m）の谷地（湿地）に運河を掘って、小舟が通行できるようにしました。これは「千両堀」と称され、今も残ります。



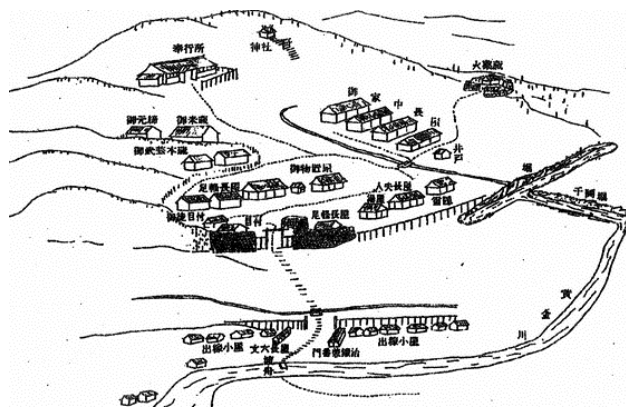
荘内藩千両堀

本陣屋は周囲を木柵で広く囲い、小高い丘の上には大手門がありました（復元）。そこから海岸や平野が一望でき、門内の衛舎では数人の足軽が交代で勤番をしたといひます。その先の一段高いところには御徒目付長屋^{おかちめつけ}と御足軽目付長屋^{おんあしがるめつけ}の 2 棟が建てられ、少し進むと道は二股に分かれます。右へ真っ直ぐ下ると平地に出、左に曲がると足軽長屋や郷夫長屋、物頭長屋^{ものがしら}、兵具倉が建ち並び、この区域は軍事的に対応する場所だったと思われま。さらに奥へ進むと倉庫群があり、兵糧蔵、元締め長屋も並んでいます。ここは、四場所の金銭の全てを取り扱う勘定所だったのでしょう。坂を上ると奥まったところに奉行所（長屋）が南向きに建ち、陣屋の全体を見渡せます。道を左に下ると御家中長屋^{ごちゆうちゆう}が 2 棟。のちの開拓判官 松本十郎も 20 代の頃に居住したこの区域は、蝦夷地四場所の管理・司令塔として大事なところでした。



復元された大手門

御家中長屋の脇道を下り、石橋を過ぎると平地になり、大きな長屋が1棟ありました。藩医・町医がいる医療施設です。隣には開墾方がいて、この長屋から開墾地に向いて農民を指導しました。生活に必要な井戸や湯屋等もあり、少し離れた木寄せ場では 樵夫や炭焼き人夫がいました。炭は暖房に使用するほか火薬の原料にもなるので、藩にとっては重要なものです。陣屋の柵外に離れて火薬庫があり、輸送に便利のように掘割も造られていました。



庄内藩ハママシケ陣屋の絵図

庄内藩の蝦夷地経営の一つ 土地開墾は 移住者（永住者）の募集に始まりますが、破格の好条件だったためすぐにまとまり、文久元（1861）年からハママシケを拠点に各地を開墾、清水村を皮切りに元治元（1864）年までの四年間で吉岡・柏木原・黄金など9カ村が開かれました。開墾方 深谷源蔵は 浜益川の水をひいて柏木原に水田を造成し、稲の栽培にも取り組みました。

一方、兵備（北辺警備）は 蝦夷地四場所の必要数 413 人に対し 実数は 264 人に過ぎず、不足分は農民で補う計画が立てられました。各農村から 105 人が採用され、西洋軍法を取り入れて鉄砲訓練を行い 帯刀を認めるなど、藩士や足軽からなる従来の兵制ではない 農民主体の新しい兵制が試みられました。これは「屯田兵」の先駆けとも言えます。

漁場については あまり利益が得られず、藩の漁場請負人も運上金の納付に窮していたことから、^{はまましけ} 浜益毛詰郡代 金井右馬介は改革をせねばと意見書を提出。主旨は 一人の請負人に委ねるのではなく 小漁業者・出稼ぎ人等一般の人々へも希望によって請負を許可するというもので、その結果、漁場は自由経営に変わりました。藩は売上金より 5 分を運上金として徴収しました。

庄内藩による蝦夷地経営も やっと軌道に乗るかと思われた 慶応 4（1868）年 2 月、「鳥羽伏見の戦い」に勝利した薩摩藩・長州藩を中心とする新政府軍が「東征」を起こします（戊辰戦争の開始）。庄内藩は旧幕府側にあつたため、箱館留守居役 白井重太衛門は 蝦夷地を引き揚げて国を護るという決断をし、船を雇って駐屯の人々を庄内へ送る計画を練りました。依頼を受けた商人 柳田藤吉は 箱館に有縁のプロシャ人 ガルトネル兄弟の蒸気船「ロバ号」に目を付け、全員を送還する契約を 5 千両で結んだといひます。郡代 金井は、各場所の役人・藩士・農民らにハママシケに集合して船を待つよう命じましたが、土着を決心して家族を持ち、開墾も進んでいたことから、急に引き揚げるには困難と混雑を極めました。それでも同年 4 月 13 日には 酒田へ向け 出航したのでした。

これまで心血を注いで築き上げた本陣屋・奉行所以下の建物はもちろん、移住者の家屋・家具・農具も、その大部分は放棄のほかはありませんでした。陣屋においては、主要食料品その他を「ハママシケ運上屋」に保管を依頼し、藩士は身の回り品のみを持って帰りました。庄内藩による蝦夷地での政策は、成果を見る前に明治維新を迎え、志半ばで終わったのでした。



静寂の陣屋跡

なお、『庄内藩ハママシケ陣屋跡』は 幕末の国際情勢がうかがえる貴重な遺跡として、昭和 63（1988）年、国の史跡に指定されました。また当時の鎮守は『川下八幡神社』として残され、地域住民に親しまれています。

■■■分科会だより

写真で見る「新川フットパス」

前田森林公園から新川の河口（日本海・オタネ浜）まで歩いて行こう！7月7日（土）川の日、「新川流域を楽しくする会」と手稲郷土史研究会の共催により、『新川フットパス&川下り』を実施しました。前日まで降り続いた雨のため新川が増水し、当初計画のカヌー体験は残念ながら中止となりましたが、21名が往復約8kmの行程に挑戦しました。当日の様子を写真で追ってみましょう。

①「前田森林公園」の新川側広場にて出発式、9:00スタート！



② ゴミ拾いを兼ねて、新川河川敷へ…。「明治19年、新川は手掘りで掘られました」と、手稲郷土史研究会の村元会員による熱心なガイド。



③ 10:20 新川河口に到着。河口一帯の歴史と生態系の概略を学ぶ。



④ 銭函街道跡（古道）を歩く。



⑤ 「オタルナイ地名記念碑」を見学する。



⑥ 砂丘地帯にはハマナス、ハマヒルガオ、ハマエンドウなどハマのつく植物が目立つ。



⑦ 浜辺は車の出入りが制限され、静かな海を取り戻していた。波の音を聞きながら昼食。



次回の『新川フットパス&川下り』は、9月8日（土）に予定されています。「北海道150年みらい事業」として、ガイドブックにも掲載されました。会員の皆さまの参加をお待ちしています。

渡部孝次（手稲郷土史研究会 新川運河部会 代表）

日帰り研修旅行へのお誘い

当会恒例のバス旅行——今年はとなりまち石狩市厚田を訪ねます。どうぞご参加ください！

- 実施日 / 9月22日（土）9:00～16:30 手稲区民センター前発着
- 見学先 / 「伊達邦直主従北海道移住の地」碑・厚田油田掘削跡・「厚田村発祥之地」碑・道の駅石狩『あいろーど厚田』（郷土資料コーナー）・子母澤寛生家跡 ほか
- 参加費 / 2,500円（昼食費・バス代金・資料代等を含む） ■ 定員 / 36名
- 申込み / 手稲郷土史研究会定例会にて回覧の申込書に記入、もしくは研究部：村元副部長（☎694-5907）あてお申し込みください。9月12日（水）締め切り。

■■■分科会だより 神居古潭でジオパーク指定運動のいまを聴く

手稲郷土史研究会「手稲石の会」は、6月17日、ジオパーク指定運動の中心核となっている旭川市・神居古潭周辺の見学会を開催しました。参加したのは本会会員のほか、稲雲高校前の市道にコスモスを植えている「花族会議」の計8人。2台のマイカーに分乗して北上しました。説明役をサイエンスボランティア旭川の河村勤氏、宮崎武雄氏にお願いしました。河村氏は稲雲高校校長時代、花族会議の一員として交流があった縁で、見学会が具体化しました。

神居古潭といえば、石狩川の急流と連なる奇岩に目を奪われる絶景の渓谷です。これが研究者にいわせると、1億5千万年前、陸と海のプレートのせめぎあい、宗谷岬東方から南は三石まで350キロにわたって盛り上がり、神居古潭ではさまざまな岩石を巻き込んで地表に噴きあがり、露頭では道内唯一の場所として垂涎的となっているというのです。



蛇紋岩の説明を受ける参加者

川岸で食堂を営んでいた女将は、大雨で石狩川が増水したとき、巨岩が押し流され、ぶつかりあい、こすり合うその音たるや、天も地も壊れるのではと思わせる轟音が響き渡り、恐ろしくて眠れなかったと言っています。一度に100人以上は渡るなと注意書きがある吊り橋から岩石をよく見ると、水あめを引き延ばして一方を手元に引き寄せ、くっつけたような紋様や巨大なグラインダー

で掘ったような穴など、自然の所作とは思えない奇岩が続き、渓谷は緑泥片岩、チャート、石灰岩、蛇紋岩など神居古潭変成岩がいたるところに分布しているのが特徴です。

また、別の場所には、高さ30メートルもあろうかと思わせる巨岩がそそり立っていました。赤茶けた岩石は、層雲峡の柱状節理より粗く感じます。これはチャートと呼ばれるもので、放散虫、海綿動物などの殻や骨片が海底に堆積してできた岩石です。アイヌの人たちは、この巨岩をイパタムシュマといい、災いを鎮める信仰の象徴でした。岩の傍に底なし沼（現在は碑のみ）があって、長老が妖刀を投げ入れたとの伝説が残っています。遠望ながら地層面と斜交する縞模様がくっきり見える高砂台礫層も見学しました。

お昼は昭和13年創業の和風旅館『扇松園』で幌加内そば。行列ができる人気店です。

午後からは上川郡農作試験所事務所棟を見学しました。明治19年に建造された旭川最古の建造物で、市指定文化財となっています。

サイエンスボランティアのグループは、神居古潭渓谷再発見プロジェクトを柱に「あさひかわジオパークの会」を組織し、道教育大旭川校地学研究室に事務局を置いて、会員は約60人。『神居古潭ジオマップ』などを配布、啓蒙活動を続けています。

帰路には、JR新十津川駅に立ち寄り、記念撮影しました。現在の運行状況は午前9時28分に下り列車が到着、同10時にこの車両が折り返すと、もうその日は列車が来ないという日本一早い最終列車発車駅として、マニアの人気を集めています。どうみても廃止の日が近いようです。



新十津川駅舎前で

一ノ宮博昭・若松幹男（手稲郷土史研究会 手稲石の会）



会報『郷土史ていね』は、web上でも閲覧できます。札幌市ホームページから、[手稲区→手稲区の概要・歴史→ふるさと手稲歴史発見事業→手稲郷土史研究会との連携]へ進んでください。